

〔先哲叢談 後編 四〕源洞巖

洞巖與新井白石情交尤密、輸寫款誠、無所不至、東南隔絕、相互知己於千里外、雁魚往來、殆無虛日、寬政中、仙臺工藤鞏卿就其孫義路字子學 四郎搜索遺篋、於敗紙中得白石與洞巖國字書牘七十六通、編輯先後爲二卷、題曰新佐手簡、雖其書盡不備、得當時事實者頗多矣、今據其書所言、則白石與洞巖未嘗有一面識、山河索居、特以書信相交數十年、其虛襟契素亦一奇事矣、

〔雲萍雜志 四〕予○柳澤 淇園が江戸にくだるころ、親しく交はる友ありて、雞黍の約を結ばんことをもとむれば、諾して後にその志しを見ばやとある時、食客五人を養ふに、賄の事薄ければ、一人に黄金五兩をあて、二十五兩貸し給はれと、その人に乞ひければ、いと安きことなりとて、みづから持ちきて貸しけるに、此歳の末の債逼れば、又二十五兩貸せよといふに、先に貸したることをもいはで、こたびももて來り貸しにけり、そのまゝ、三とせを過ぎつれども、こがねのことは少しもいはで、前にかはれる心もなく、いよ／＼親しみ交はりけるに、その人はからず禍ありて、多くのこがね入ることあれども、少しも色に出ださゞりけるが、その妻夫に云ひけるは、五十兩のこがねをかりて、七とせ過ぐるに返さゞるは、欺き奪ふ心ぞといふに、否とよ、彼人予をあざむく心なし、乏しきがゆる返さゞるなり、刎頸の交情は、婦女子の知れるところにあらず、ふた、び此事をいはゞ、夫婦の縁を絶つべしと、いきどほれば、この後妻もいはずなりぬといへるはなしを、ある人來りて、予に告げければ、予はその無を無として返さるゝことの能はざるを悔れば、告げたる人また彼處にいたりて、予がいふことを、その人にかたるに、その人こたへて云ひけるは、人は不實をなしたりとて、その交りを絶するは、知己親友といふにはあらず、欺くも不實も、その折からの是非なきにして、世に始めより詐僞をかまへて、人に交はる輩はなし、そのいつはるとあざむくとを許さゞれば、知己親友とは云ふべからずとて、予が詞にこたへけるよし、そのことをき、